

不思議の森のフルーツ

遥かなる宇宙の果てには、この地球上では考えられないような世界があるのではないかと思われるときがあります。この物語は、そうした世界のひとつをモデルにしたものです。

第1章 旅立ち

音楽町という町がありました。この町は、つい最近できたばかりの元気な町で、こんな提案を書いた立て札が至るところに置いてありました。

「音楽を奏でて、一日を楽しく過ごしましょう」

実際、そこに住む人は、日がな一日楽器を奏でていました。町のあちらこちらから、ありとあらゆるジャンルの歌が聞こえ、チャッチャカとリズムに乗ってアイロンをかけている洗濯屋さんや、鼻歌混じりにフライパンを操るコックさんがいるかと思えば、そのなかで歌を歌いながら。酒を酌み交わす人もありました。

「まってよお！」

坂の上から18, 9の大きな目の女の子が、駆け下りてきました。リンゴを入れたかごを抱えています。その前を一本の笛が転がり落ちていきます。きっとその子のものなのでしょう。

追いついたわ、と女の子が思った瞬間、白いものがちらっと横切ったかと思うと、笛は急に見えなくなりました。

「あらら・・・消えちゃった！・・・あれがないと困るのに・・・。」

急いであたりを探しましたが、その日その子の笛はとうとう見つかりませんでした。その夜、女の子はベッドに入っても、笛のことが浮かんで来て、眠れませんでした。それほど、その子にとって大切な笛だったのです。

「そうだわ、明日は、占いのおばばにみてもらおうかしら。」

“占いのおばば”という人は、町外れの一軒家に住んでいました。おばばに頼んで占ってもらえば、探し人も来る、落とし物も見つかるという、たいそうな評判でした。

「・・・おまえの笛は・・・戻るにゃあ戻るが・・・」

大きな水晶玉を見ながら、おばばは言いました。髪は真っ白、それにたいそうな猫背でした。

「なに？ なにか悪いことが？」

「探しに行けば見つかるが、おまえがこの街に帰ってくるのはたいそう遅くなる・・・そう出ているね。」

「なんで～？」

「それはまだわからないんだけどねえ。」

「ふ～ん・・・でも、あの笛がないと、私お仕事にならないのよねえ。じゃ、ちょこっと行ってきますう。」

こうして、女の子の旅が始まったのです。

第2章 花師

「たしか、おばばは、笛は東の方にあるって言ってたわよねえ。」

笛をなくした女の子は、とりあえず音楽町から出ている2本の街道のうち、東にのびる街道に行くことにしました。とりあえず、1週間分の食料と、お金を少し、それから2番目に気に入った笛をザックにいれました。というのは、あの笛ほどではないにしろ、この笛でも曲がりなりにも彼女の仕事ができただからです。

さて、東にどんどん行くと、やがて最初の町「にぎわい市」が見えてきます。この町は、ちょうど2つの大きな街道が交わるところで、昔から交通の要所として栄えてきました。旅人たちの世話をする宿屋や食堂が多く、通りはちょうど夕暮れ時で、宿を探す旅人たちでいっぱいでした。

「そうそう、私も泊まる場所探さなくちゃね。」

町の入り口からまもなくのところに、一軒の宿屋がありました。屋根が目覚めるような真っ赤な瓦でふいてあり、それが女の子の目を引いたようです。

「ごめんください。泊めてくれますかあ？」

女の子がそう言うと、宿屋の受け付けに座っていた50位の和服のおばさんが、帳簿をつけるのをやめて女の子を見ました。

「へえ。ようおこしやす。・・・じゃ、ここにお名前書いておくれやす。」

女の子は宿台帳に「音楽町1丁目15番地マリンバ荘 ミーメ 花師」と書きました。

「はなしい？聞いたことおへんなあ。噺家とちがいますのん？」

「百聞は一見に如かず、いいですか？見ててね。」

女の子・・・ミーメは笛を取り出して、吹き始めました。すると・・・あたり一面に、花や花びらが次々と舞い落ち、床を埋め尽くしてしまいました。

「ひやあ・・・でも、きれいやわあ。」

「ほんとは、もっときれいなのもできるんですけど、いま笛をなくしちゃってて。実はそれを探してるんですけど。・・・ひょっとして、この町でこれと同じ形の金色の笛を見かけなかったでしょうか？」

「へえ・・・そうですねえ・・・最近そないな笛見たという話は・・・でもお気の毒ですなあ。・・・みなさん、すみませんなあ！ちょっときいておくれやす。」

おばさんは、回りにいた人にきいてくれました。

「このひとが金色の笛なくした、いわはるんですわ。だれかこの町で見た人いてへんか？」

「さあなあ、知りまへんなあ。」

「うーん、どうやったかいなあ。」

お客さんたちも、首をひねったり傾げたりしていましたが、どうやらこれはという情報はないようでした。

「あかん。こりやだめみたいやわあ。すみませんなあ、お役にたてなくて。」

おばさんは申し訳なさそうに言いました。

「いいえ。こちらこそ、ご迷惑をかけてしまったみたいで、すみませんでした。わざわざ聞いて下さって、どうもありがとうございました。」

ミーメもこのときほんとうに申し訳なく思っていました。でも、その一方で、

おばさんが親切にしてくれたことがうれしくもありました。

「おばさま、お風呂はいつ入るんですか？」

「えっ?! そないなこと急に言われたかて。・・・いややわあ。」

いきなりお風呂のことを聞かれたので、おばさんは頬を真っ赤にして目を白黒させています。

「いいからあ・・・。」

「そうねえ・・・朝の10時頃かな？」

「じゃ、あしたもそうしてくださいね。」

「へえ・・・。」

翌朝、おばさんがお風呂に入ろうとふたをあけると、湯船に花びらがいっぱい浮いていて、いい香りを放っていました。

「あれ。もしかしてこれあの人が・・・。」

第3章 城塞都市 カブー

『にぎわい市』を出たミーメは、また東へと急ぎました。これまで、『音楽町』を出たことのない彼女にとって、地図をみながらの旅というのは、どうも不安でぎこちないものです。でも、この時のミーメは、この次の街を通らなければならない、ということで、特に緊張していました。

「たしかこのまま行くと、『城塞都市カブー』だったわね。」
カブーというのは、四方を城壁に囲まれていて、特異な文化を持っているというので有名なところでした。といっても、カブーの住人が街を出ることはあまりなく、ただ、希によその国の旅人がそこを通り過ぎるときに、なにか違った雰囲気を感じた、という噂があるのみでした。

街の入り口にさしかかったミーメは、さっそくなんともいえない気分になりました。

人っ子一人いない、というのは、まさにこのことをいうのでしょうか。人も動物も見えないのです。あるのは石造りの建物だけ。まるでどこかの迷宮のようです。でも、『変わった文化』というからには、きっとどこかに人がいるはずだわ、と自分を励まして、ミーメは進んでいきました。とにかく通らなくてはならないのです。

この町は、城塞都市といわれるだけのことはあって、家々の壁も真っ直ぐ並んでいます。それでさっきこの町が迷路のように感じたのでしょうか。その真っ直ぐな道を進んでいくと、大きな建物が見えてきました。幅1メートルはあろうかという柱、それに壁には荘厳な彫刻もあります。ミーメの地図には、『ハラバ神殿』と書いてあります。

「神殿だったのね……。さすがにすごい彫刻。」

ふと、前から人らしき影が歩いてくるのが見えました。その影はどんどん近づいてきます。やっぱり人がいたんだわ……。ミーメはほっと胸をなで下ろしました。

「やあ。」その人は言いました。みれば、同じ年頃の女の子です。

「こんにちは。」

「あまり見ない顔だね。どこかから来たの？」

「ええ、『音楽町』から来たところなの。」

「ああ、そうなの。ぼくは前ここに住んでいたティリカっていうんだ。」

「私はミーメ。」

この人は、女の子なのに「ぼく」というんですね。でもミーメが見た印象では目がとても澄んできらきらしていて、どうやら悪い人ではなさそうです。

「前ここに、住んでいたって……。？」

「ああ、みんな引っ越したからね。ぼくは大事なものを忘れたんで、とりに来ただけなんだ。」

「引っ越したって……。町の人全部？」

「うん、そうだよ。ここにいると不吉なんでね。」

「不吉って、どういうこと？」

「ぼくも詳しいことはわからないんだけどね、ガジンコジン歴によると、おととい、256年ぶりに都を移さないといけかったんだってさ。」

「ガジンコジン歴？……。それって、“こよみ”なの？」

「うん。そうなんだ。カブーでは、そのガジンコジン歴が生活そのものなんだ。たとえば、ぼくは4月1日に生まれたんだけど、この日は聖人ティリコの日ということになっていて、この人が男の人だったので、ぼくはずっと男言葉で話すということに決まっているんだよ。」

「そうか、それでその言葉遣いなものね。」

「うん。でも、このほうが気持ちがいいような気がするよ。回りの女の子たちよりはね。」

「ふうん。」

確かに、この町は変わった文化を持っているようでした。ふと、ミーメは笛のことを思い出しました。あまりにもこの町のことに関心がわきすぎて、この時まですっかり忘れていたのです。

「ねえ、こんな・・・」ミーメは銀の笛を取り出しながら言いました。
「笛で、金色の笛、どこかで見なかった？」

ティリカはしげしげと笛を見て言いました。
「ふうん、これを探してるんだ？悪いね、まったく見たことない。」
「そう・・・。じゃ、いいわ。ありがとう。・・・そうそう、ところで、あなたは何を探しに来たの？」

「ぼく？ぼくは、これ。」
そう言って、ティリカが取り出したのは、1本のナイフでした。銀色の柄に赤い石が3つもはめ込んであります。
「わっ、ずいぶん物騒なものを探しに来たのね。」
「でも、これ大切なものなんだ。父さんの形見なんだよ。引っ越しの時に知らない間に捨てられちゃったらしいんだ。」
「そうだったの・・・。」
「じゃあな！」

それだけ言うと、ティリカは走って行ってしまいました。これで、この町は、もう本当に無人の町になってしまったようです。
「もうここにいても仕方ないわね。」

第4章 時空都市 タンプルスカ

カブーを出たミーメは、さらに東へと進んでいきました。やがて山岳地帯に入り、道はだんだん険しくなっていきます。

森の道は、夜の暗闇がおそってくる前に通り抜けなければなりません。
と、なにかばしゃばしゃと音がします。

「たすけてー」

小さな声ですが、たしかにそう聞こえました。あわてて声のするほうに行ってみると、1匹のりすが溺れています。ミーメは、銀の笛を取り出して吹きました。どこからか蓮の葉が落ちてきてりすのそばに落ちま

した。

「それにつかまって！」

りすは、蓮の葉につかまって岸に流れ着きました。しばらくはせいぜい言っていましたが、やがてミーメにおじぎをしてみました。

「どうもありがとうございました。ぼく、トンクンと言います。」
「大丈夫？よかったわね。それじゃあ。」

ミーメはまた歩き出しました。でも、山道は、やはりきつかったのでしょう。どうにか日が暮れる前には森を抜けたものの、頂上に着く頃には、ミーメも回りのことが目に入らなくなるくらい疲れ切ってしまっていました。

「あー、やっと頂上かなあ……。あれ？ああああっ！」

なんと、そこには城が逆さになって空に浮かんでいるのです。ミーメは、はじめ自分が疲れすぎて、ひっくり返っているのかと思って、驚いたのですが、よくよく眺めてみても、やっぱりどうしても「城が逆さになって浮いている」どしか思えないのです。

「驚いたかな？」

ミーメが唖然としていると、不意に後ろから声がしました。

「えっ？！えええっ！」

振り返ると、ひとりのおじいさんがにこにこしながら立っています。

「あ、あのー、あのお城、逆さになってうかんでいるんですねえ？」
「うん。そうじゃよ。もっともああいう姿をしていなくては時空都市といっても誰も信じないからなのじゃがな。」

「時空都市？」

「それは、なかにはいつてから話してあげよう。」

「えっ？なかに入れるんですか？」

「ああ、はいれるとも。じゃが、おまえさんの場合は、ご招待ということになるかなあ。」

「ご招待？」

「ちと目をつぶっていなさい……。さあ、ついた。」

「ああっ！」

ミーメが目をつぶっていたのは、ほんの一瞬のはずでした。でも、いつの間にか彼女は、どこかとても広い宮殿の大広間に立っていたのです。そして広場は、とてもにぎやかでした。大きなパンを運ぶ人、紙芝居に集まっている子どもたち。背伸びをしているシャム猫……。そこが空中に浮いた宮殿の中だということを除けば、本当にごく普通の平和な広場のようでした。

「ここは？」

「さっきおまえさんが見ていた時空都市のなかじゃ。ここはサンヨハン広場という。」

「へえ。とても美しい広場ですね。」

「ありがとう。そうしてくれるとわしもうれしい。作った甲斐があるかというもんじゃなあ、うん。」

おじいさんは、きれいにのびた顎髭を、さも嬉しそうに撫でています。あたかも自分の子どもをほめられた親がそうするように……。

「あの一、ひょっとしておじいさんは、こちらの王様かなにか？」

「まあ、言ってみればそのようなものじゃな。」

「やっぱり……。」

「みんなは博士と呼んでくれとるが。ま、そういう話は、ここではなんじゃから……それに、おまえさんには、返さなければならぬものがあるのぞな。」

「えっ？」

おじいさんに案内されるまま、ミーメは、豪華な部屋に入りました。部屋中の家具は、明るい青系統の色に統一され、窓からは、いままさに暮れていこうとしている太陽の柔らかな赤い光がこぼれています。

「おまえさんにここまできてもらったのは、ほかでもない。これを返そうと思っただのう。」

「あっ、それは！」

そこには、ミーメが探していた、あの黄金色のフルーツが、1匹のうさぎの手に載っていたのです。

「どうして、ここに？」

「いやあ、本当に申し訳ない。実は、開発中の宅配装置の制御がうまく

いなくてのお。あのうさぎなんじゃが。」

おじいさんは応接間に案内してくれました。そして、コーヒーを入れながら、これまでのいきさつを話してくれました。

おじいさんは、正式には、ドクター・ノアといい、この1つの町のような宮殿を設計した人でした。次元管理理論という難しい理論を確立し、その理論に基づく都市を作り上げたのです。

「ここからは、宇宙のすべての時間、空間が見られるのじゃよ。」

ノア博士は、ミーメにコーヒーを運んでから、その部屋においてあるテレビのようなものを操作して言いました。スイッチを押す度に、違う風景が映っていきます。

「それで、私のことも？」

「うん。もっともそれはおまえさんが旅に出てから、なんじゃがな。このうさぎが、おまえさんのフルートを持ってきてしまったもんじゃから、なんとかここまでたどり着いて欲しい、と思ってなあ。」

「このうさぎは？たしかさっきは、宅配装置って？」

「うん。これは本来、遠くにあるものを一瞬のうちに取り寄せられる、というものなんじゃが・・・作ってみると、思いがけずいろいろな点で難しくてのお。どうも動物に形を似せると、その動物の本能みたいなものが出来てしまうらしい。」

「へえ。」

「これは白いほうだが、ほんとうは黒いうさぎもいたんじゃ。それは本当の行方不明になってしもうた。」

「あらら。」

「もし、旅の帰りにでも見かけたら、知らせておくれ。わしはこんなことを頼めた義理ではないかもしれないが。」

そして、その晩ミーメは、ノア博士が用意してくれたゲストルームに泊まりました。

「じゃ、気をつけてな。無事についたら、連絡しておくれ・・・それから、これをあげよう。なにかで困ったときに、使うといい。」

ノア博士は、小さな巻物のようなものをミーメに渡しました。

「ありがとうございます。」

「あ、それから・・・もうひとこと言っておきたいのじゃが。」

「为什么呢？」

「その笛は、おまえさんにとってなにかな？」

「はあ・・・？」

思いがけない質問でした。笛は、彼女にとって、物心ついたときから吹いている楽器であり、“音楽師”を生業とする彼女の商売道具でもあり・・・しかし、いまここで改めてそれについて「なにか」と尋ねられると、“とても大切なもの”であることは確かだとしても、それだけのものなのか、それ以上のものであるのか、という点では確信が持てないのでした。

「おそらくおまえさんは、その笛にこそ特別な力があると思っているのじゃろうが、実はそうではない。そのことをよく覚えておくことじゃ。」

「はあ・・・そうなんですか。」

「きっと、また会うこともあるが、そのときまで、さよならじゃ。」

「では、さようなら。」

そしてミーメは帰路につきました。そのとき彼女の目の前には、早くも音楽町の風景が映っていました。懐かしい町の風景、懐かしい人々の笑顔が・・・。

第5章 迷路の森

朝の明るい日差しが森の木々のあいだから差し込んでいました。森の中は、鳥や動物たちのの声であふれ、木々の緑も鮮やかでした。まるで街の中とは、空気まで違うかのようです。

「ここは、まるで天国みたいね。」

帰って、しばらくしたらときどきハイキングに来よう、とミーメは思いました。それに、ノア博士のあの不思議な宮殿もちよつと気になります。あのうさぎちゃんは、本物そっくりだったけど、服を着たうさぎちゃんて、かわいかったなあ・・・。あれで黒いうさぎがもう1匹・・・かあ。

がらがら、どしん！

「あー！あいたたたっ！」

突然、自分の体が宙に浮いたかと思うと、おしりを強く打ったようです。あわててまわりを見渡すと、やはりもとの森・・・でも、いまたしかにどこかに落ちたような感触でした。上を見上げて、ミーメは驚きました。

彼女の頭の上には、なにやら黒い雲があって、そこにぽっかりと穴があいていました、そして、穴の向こうには、やはり森らしき風景が広がっていたのです。

「じゃあ、私、あそこから落ちて、ここへ？」

とにかく、もとのところに帰らなくては・・・ミーメがそう思った時です。黒雲に大きくあいた穴がするするとふさがって行くではありませんか。

「あっ、あああっ、あーあ・・・。しまっちゃった。」

穴がふさがってしまっっては、どうしようもありません。下のこの森のほうを歩いて行くしかないのです。ミーメは、しかたなく森の中を歩いていきました。

ミーメは、ふとどこからか笛や太鼓の音が聞こえてきているのに気がつきました。なにかお祭りのような、楽しそうな音楽です。「むこうに行けば帰り道を教えてもらえるかもしれないわ。」

そう思って、音のするほうへと歩いていくと、ミーメの背の高さほどの檜のまわりで、すずめや山鳩たちが踊っていました。

「おや、おめえは何でえ？」
うしらで声がしました。振り返ると、きつつきが一羽、ミーメの視線よりすこし高めの枝にとまっています。

「あ、わたし？」

「ああ、おめえのこった。」

「私はミーメ。音楽町から来たんだけど、なんか深い穴に落っこって、道に迷ってしまったみたいなの。どこを行けば帰れるのかしら？」

「さあなあ・・・。おめえのような大きな生き物のいるところがどこかにあるってえのは聞いたことあっけどなあ。」

きつつきは首を傾げて言いました。(大きな生き物……そういえば、櫓で踊っていたのはみんな鳥ばかりだったわ、ひょっとして、ここには、鳥しかいないのかもしれないわ。) ミーメはそう思いました。

「でもまあ、ご隠居さんだったら知ってっかなあ。なんだったら、おいらが案内してやってもかまわねえが。」

「お願いします。」

「ほいきた。」

きつつきのあとについていくと、大きな榎の木があり、そこに一羽のふくろうがとまっていた。やはり、この森には鳥しかいないようです。

「音楽町とな……はて、きいたことのない地名じゃが。まあ、なんにしても、とかくこの世には不可解なことが多いということじゃな、うん……。じゃが、違う世界ということなら、心あたりがないわけではない。」

「あ——、もう、じてってえなあ。だからなんだってんだい。」

きつつきが目を三角にして怒っています。

「どうもご隠居の話は回りくどくていけねえよ。」

「慌てるでない。いま地図を出すから、よっこいしょっと……。」

ふくろうのご隠居は、木をくりぬいて作ったいろいろな家具の中から、巻物のようなものを出してきました。

「ああ、これじゃこれじゃ。どれどれ……ふーむ、ここから西に行くと古井戸がある。……古井戸やかっこう飛び込む……ああ、そんなこといってる場合ではないな……。その古井戸から、昔たいそう大きな動物が出てきたので、それ以来その井戸は『底抜け井戸』と呼ばれるようになった、と、こういうわけじゃな。」

「あの一、ちょっと聞きたいんですけど。」

「なんじゃな？」

「その動物って、私みたいなの？」

「それはようわからん。ただ、身の丈が1カメルあったというからのお。わしの背丈の3倍はあったらしい。」

ふくろうとはいってもどちらかというと小型のふくろうのご隠居の3倍…では、とても人間とは思えませんが、もしその井戸がほんとうに違う世界とつながっているのだとしたら、行ってみる価値はありそうです。

「ふくろうさん、きつつきさん、どうもありがとうございました。行ってみます。」

「そうかい。では達者でなあ。」

「帰ったら手紙でもくれや。」

西へ歩いていくと、たしかにそこからあまり遠くないところに古い井戸がありました。

第6章 ジッテン村

□ (1) ジッテン村の鍵

古井戸は、その名の通り、たいそう古びていました。でも、どこか普通の井戸と違うところがあります。なかは。ミーメが楽に入っていけるくらい広く、降りるのにちょうどいい梯子まで付いているのでした。

「そうだわ。これ、井戸と言うよりもまるで煙突みたいなんだわ。」

ミーメはしばらく考えていましたが、やがて梯子を降り始めました。降りていくと、なんとも言えない良いにおいがしてきました。なんともかぐわしい花の香りです。やがて地面に着きました。目の前には、どこかの部屋らしい光景が広がっています。ミーメは、とにかくそこに出てみることにしました。

「おやおや、また変わった生き物がきたね。」

横の方から声がしました。見ると、レースのブラウスを着て、綺麗な刺繍のついたスカートをはいた1匹の大きな狐が、大きな揺り椅子に座ってこちらを見えています。ちょうど人間くらいある、かなり大きな狐です。

「はじめまして。私、大きな森の井戸からおりてきたところなんです。」

「そうかい。どうやらそうらしいねえ。この煙突から来る動物は、たいがいそういつてくるからねえ。」

狐は、編み物に目を移しました。さっきから椅子に腰かけて、編み物をしていた様子です。狐なので、見た目では年齢がよくわかりませんが、話すのを聞いているとどうやら相当年輩のおばあさん狐のようです。

「じゃあ、何度か私みたいにこの煙突から来た生き物がいるんですね。」

「ああ、そうとも。で、そのたんびに、ここはどこか、そんで出口はどこかと聞いていくんだよ。あんたもきつとそうきくんだろ？」

「ええ、ぜひお願いします。」

そのとき、彼女には、おばあさん狐がにやっと笑ったように見えました。

「じゃ、なぞなぞいくよ。」

「えっ？」

「問題。明るいときは見えなくて、暗くなると見えるもの、なーんだ？」

突然なぞなぞが出てきてびっくりしましたが、いつかどこかで一度やったことのある問題でした。

「えーと、月や星かなあ。……。」

「はい。正解。……じゃあ説明してあげようかね。まずここは『ジッテン村』というところなんだ。で、たしかに出口というか他の世界との交差点みたいなところも、どこかにはあるらしい……。」

「どこかには、ですか？」

「うん。とういうわけか、この村には代々いくつか鍵が伝わっているんだが、なんでも、それを全部見つけだして、ある一点に置くと、どこかの扉を開くことができるんだそう。でも、いままでにどこかから来てその鍵を集めた生き物たちはみんながみんな、鍵だけを残して。そのままどこかへ消えてしまうんでねえ。この辺の者には詳しいことがわからない、というわけさ。……ええと、全部で……いくつだったかねえ。……エカテさんとこと、駐在さんとこと、ジオルマーニさんとこと、カッペンさんとこと、小学校と、……うん、そうそう、5つくらいかねえ。」

「なんだかこわいけど……それしか方法がないのなら、とにかくやっ

てみないとはいけませんね。じゃあ、これからそれを全部まわってみます。」

「あ、それからね、ついでだから教えてあげるけど、この村の人たちは、なぞなぞに答えないと、何も教えてくれないからね、」

「あ、それでさっき……。」

「ああ。そういうこった。面倒だろうけど、それがこのへんの者の何よりの楽しみなんでね。つきあってやっとなんか。何かで困ったら。またおいで。ロツテ婆さんといえばわかる。まず、この家を出て右側の道を、大きな栗の木を右手に見て歩いていくと、大きな榎の木の下に、赤い屋根の家が建っている。そこがエカテさんのうちだよ。」

「わかりました。いろいろありがとう。」

なぞなぞの村……なんだか楽しそうな気がしてくるけど、でも、消えた生き物たちは何処に行ったんだろう？私もそこにいくのかなあ……。

そんなことを考えながら、桜色の歩道を歩いていくと、なるほど、大きな栗の木が見えてきました。

□ (2) エカテさんの水時計

「あ、ここね。」

ミーメは、赤い家の前に着きました。クッキーみたいなドアに、かわいいベルがついています。

(リーン)

「あ、はいはい。今あけますよ」

中から声がして、鍵を開ける音。その音もまた、カチカチと時計が鳴っているような音です。

でてきたのは、さっきのロツテお婆さんと同じように人間ほどの背丈のある動物でした。でも、大きく突き出した歯、小さめの耳を見ただけでは。ミーメには、何の顔なのか判断がつかねました。ネズミ……いえ、りすかも……。

「おやあ、あなたは見慣れない顔ですね。」

「ええ、いまさっき来たばかりなんです。実は、道に迷ってしまって。ロツテお婆さんから、この村の出口について教わってきまし

た。」

「ああ、なるほど。……じゃ、もうなぞなぞのこともわかってますね。うふふふ。それでは、問題です。……いつも同じなのに、同じじゃないもの、なーんだ？」

これは難しい。いつも同じもの、でも同じじゃないもの……。ミーメはそのときふと、水が流れる音が聞こえているのに気がつきました。水？水の流れ……川……あ、そうだ！

「あ、川の流れですか？流れは同じだけど、水は絶え間なく変わっていきますもの。」

エカテさんは、少しびっくりしたような顔をしましたが、すぐににこにこ顔になって言いました。

「ああ、そう、それが正解です。よくできましたね。でも、ほかに、風というのも答になりますね。君は見かけに違わず、賢いお嬢さんのようですね。お入りなさい。いいものをお目にかけてみましょう。」

エカテさんのあとについて入っていこうとして、ふと彼の背中を見ると、ふさふさした立派なしっぽがあるではありませんか。ああ、この人は「りす」だったんだわ……。

玄関から、応接間を抜けて、寝室も通り過ぎて、二人が入ったのは、大きな機械のある部屋でした。その機械の中程から下の部分にかけて、水が流れています。じゃあ、さっきの川みたいな音は、ここから……。

「これはね、この村の時間を計っているんですよ。」エカテさんが説明してくれました。

「ふつうは、一日計るとご破算で、水を入れ替えなくてはいけないんだけど、これは、いい機械でね。半永久的に計れるんだ。すごいでしょう。僕が作ったんですよ。……あ、すっかりして忘れてるところだった。君のほしいものもここにあるんですよ。」

「えっ?!」

「鍵ですよ。忘れちゃった？」

「あっ！」

ミーメは思いました。(そうだわ、私って、すぐ何かに夢中になってしまっただわ。)

「さあ、ど～こだ？」

エカテさんが笑っています。また、なぞなぞを出しているときと同じような気持ちでいるのでしょう。

あらためて機械をよく見てみると、ノア博士のところにあふれんばかりに置かれてあった機械類と、今彼女が目の前にしている機械とは、全く雰囲気違います。博士の機械は、一般でいうところの機械と同じように金属でできていましたが、エカテさんの機械は、見たところほとんどが木でできているようです。ただ、一カ所だけ金属が使われていました。水が落ちる滝壺のようなところ、そこは、お皿のようになっており、玉のようなものが置かれてあります。吸い込み口の落としぶたに見えました。

「そう、そこの玉なんですよ。」

「えっ?!」

「鍵といっても、いわゆる扉の鍵の形をしているとはかぎらないものです。どうぞ。持って行ってかまいませんよ。」

「でも、これをとったら、時計が狂いませんか？」

「はは、心配ご無用。その玉は、実は元々機械の部品ではないんです。逆に、この玉の置き場を考えているうちに、だんだんこんな大げさな機械になってしまったようなものなんですよ。ま、本末転倒といわれても仕方がないかもしれないけどね。」

「そうだったんですか。」

この玉は、手のひらに乗るくらい。その小さな玉のために、こんなに大きな機械を作ってしまうなんて……。玉を手にしたミーメは、なんだか暖かい気持ちになりました。

「次はと……駐在さんのところへおいでなさい。」エカテさんが言いました。

□ (3) 駐在所

そのあと、ミーメは、エカテさんの家の前の道を右に曲がり、栗の木の根本を左に曲がって、駐在所に着きました。エカテさんから教わった駐在所は、思っていたより大きく、赤いレンガ作りの2階建ての建物でした。どこかから、女の人の澄んだ声が聞こえてきます。

「風澄んで 木の葉の音の 鳴り響く 静かな秋の 朝の気配よ……」

「ごめんください。」

「は～い。」

ミーメは声をかけると、奥の方からぱたぱたとかけ込んでくる足音がして、紺の制服を着た駐在さんが姿をあらわしました。この駐在さんはトラの顔をしています。

「こんにちは。あの、こちらに鍵があるって聞いてきたんですけど。」
「ああ、はいはい、鍵ね。ちょっと待って。……ああ、よそから来た人に出すのは久しぶりだわ。とびきりの出しちゃいますね。……どこまでもまっすぐ突き進む一本気、でも絶対つかめない、さわれない、これ何だ？」

駐在さんがとびきりというだけあって、これまたなかなかの難問です。前の答えは水だったけど、今度は水ではないようね、ミーメは思いました。水だったらさわれるどころか汲むこともできますものね。

ちらっ……何かが不意にミーメの目に飛び込んできました。ちょうどそのとき、この村の人らしい人が自転車に乗って二人の前を通り過ぎていったようです。

「あ、光じゃないかしら？つかめない、さわれない、って。」
「おお、よくできましたね。そのとおりです。残念だわ、とっときの問題だったのに。おほほ。」

駐在さんにはっこり笑って「これが鍵です」といいながら、手のひらにのるくらいの大さの金属の板を渡してくれました。それは丸い部分に三角形の柄のようなものがついた、ちょうど、「鍵」というよりもそれを差し込む「鍵穴」のような形をしていました。

「ありがとうございました。では私はこれで。」
「あ、ちょっと待って。見せたい物があるのよ。」

駐在さんに案内されて入ったのは、交番の受付でした。大きな地図がかかっています。その地図によると、回りを森に囲まれたこの村には14、5軒の家があり、小さな川と大きな湖、なにやら彫刻らしきものがついている中央部の広場、それにいまいる駐在所などが載っていました。家々のところには、そこに住んでいる人の名前が書き添えています。

「これがこの村の全容よ。知らない土地を歩くには、どうしても地図があったほうが便利だわ。いい？これからあなたが行くジョルマーニさんのうちは、ここから直線距離にして500メートルくらいのところにあるんだけど、その真ん中にはカデオ湖という大きな湖があって歩いてはいけないから、回り道をして森の中に行くか、渡し船を使って渡るか、どちらかを選択しなければならない。でも、私としては渡し守のアッジおじさんには悪いけど、森の中に行くコースをお勧めするわ。この道筋をよく覚えておいてね。」

「はい。でもその渡し船は何か不都合でも？」

「うん。なかなかのトラブルメーカーなのよ。あ、私が言ったということは内緒にしてね。職務上原則としてそういうことは言っちゃいけないことになっているから。」

□ (4) 渡し守のおじさん

駐在所を出たミーメは、教わったとおりに、森の中に入っていました。それにしても、あの優しそうな駐在さんが眉をひそめるような渡し守のおじさんというのは、いったいどんな人なのだろうかと彼女は思いました。

森の最初の分かれ道まで来ると、誰かがうんうん唸ってうずくまっています。

「どうしました？」彼女はその人に話しかけました。

「うーん、何かよくないものを食べてしまったようでなあ。あんた薬持ってないかね？」

「食あたりということでしたら……。ちょっと待ってて下さいね。」

ミーメは、笛を取り出しました。博士が返してくれた金色のフルートです。彼女が笛を吹くと、どこからか一枚の小さな木の葉がひらひらと飛んできて、その人の手のひらに落ちました。福の下から平べったい尾がのぞいています。あらためてその顔を見ると、一見ネズミのようでしたが、ミーメにはわかりました。この人はビーバーなのだということが。

「それを噛んでみて下さい。」

「う、うん。……にがいなあ。でもなんだか利きそうだねえ。……あ、楽になってきた。」

「よかったですね。じゃ。」

「あ、待っておくれよ。ありがとうくらい言わせてくれ。そうだ、

あんた、ひょっとして、ここから向こう岸まで行くんじゃないか？ そうだろう？」
「え、ええ、まあ。」
「だったら、お礼に俺の船に乗せていってあげるよ。俺はアッジというんだ。」
「ああ、あなたが。」
「おや？ 俺を知ってる？」
「あ、いえ、ちらっと聞いただけなんですけど。」
「そうかい、嬉しいねえ。あんたみたいな変わった生き物にまで知られているとはね。」

そうです。この人が駐在さんが言っていたアッジおじさんだったのです。でも、親切で乗せてくれるというのに、今さら乗るのがいやだとは言えません。ミーメは仕方なくついていきました。

船は岸を離れ、おじさんは気持ちよさそうに櫓を漕いでいます。
「はー、おらが船は村のよーー、風上をいくよ」
しばらくして向こう岸が見え始め、このぶんだと、無事に渡りつけそうだな、とミーメが思ったときです。

「よお、コントカじゃねえか。どこいくんだい？」
いつの間にか船がもう一槽、寄ってきていたのです。かわうそらしき人物が乗っています。
「やあ。これから買い物でよお、街まで行かないといけねえんだ。かかあが匙を買ってこいとうるさいんでなあ。」
「そらご苦労なこった。あ、そうだ、それでこのあいだの奴だが……」
「うんうん。」

そうして二人はそのまま2時間くらい話し続けました。話し出したらきりが無い、というのはこういうことを言うんだなとミーメは思いました。駐在さんが言っていた「トラブル」というのは、きっとこの話し始めたら止まらないおじさんの性格のことだったのでしょう。でも、もう日も暮れようとしていますし、すこしおなかもすいてきましたので、とても待つてはいられません。

「あの、すみませんが、そろそろ日も暮れますし。」
「ああ、そう。……それでな、またあいつがさあ……。」

おじさんはすっかり話に夢中でとても船を出してくれそうもありません。彼女は仕方なく笛を取り出しました。

ミーメが蓮の葉に乗って船を離れるときも、おじさん達はまだ話し続けていました。なるほど、これではトラブルメーカーと呼ばれても仕方がないようです。

岸边には、青い屋根の小さな家が建っていました。

□ (5) わた菓子工場

川沿いのジョルマーニさんの家というのは、煙突を持った工場でした。なにか食べ物を作っているらしく、いい匂いがしてきます。

「ああ、そういえば今日は朝から何も食べていないような気がするわ。でも不思議と本当にぺこぺこというわけでもないような……変ねえ。」

「あんたかね、鍵をとりにきたというのは？」

後ろで声がしました。振り返ると、食品の工場でよく見るような白衣姿の人が立っています。

「あ、そうです。初めまして、ミーメと言います。ジョルマーニさんですか？」

「うん。そうだよ。昼間駐在さんから電話をもらってね、鍵を渡してやってくれてさ。でもずいぶん遅かったね。」

「ええ、まあ……」

まさか渡し守のおじさんの親切のせいで遅くなったとは言えません。それにおじさんが勧めてくれたからとはいえ、結果的に駐在さんの忠告を聞かなかったことになってしまっているのです。でもあの駐在さんは、前もって電話までかけておいてくれていたのですね。

「ま、あがって。すべてはそれからだ。」

「すみません。お邪魔します。」

犬の顔をしたジョルマーニさんは、ミーメを食堂に案内してくれました。テーブルには奥さんと4人の子ども達が座っていて、ひとりひとりミーメに挨拶をしてくれました。やがて、彼女の前にもお皿が出されました。料理は、ふわふわした白いかたまりで、ちょうど「わた菓

子」のようなものでした。

「お口に合うかな？」

ジオルマーニさんがにこにこしながら言いました。一口食べてみると、さくさくとして、甘い味が口の中いっぱいに広がりました。一緒に出された紅茶とよく合います。

「おいしいです。」

「それはよかった。何しろこの村では、これが主食だからね。ほかには食べるものは何もないんだよ。」

「他にはないんですか……。」

「あとで作り方を教えてあげようね、さて、と……。」

ジオルマーニさんは子ども達に言いました。

「おまえたち、お客さまに問題を出してあげなさい。」

「え。いいの？」いちばん背の高い子が嬉しそうに言いました。

「こんな機会は滅多にないからね。ミーメさん、すまないが、この子たちの問題に答えてやって下さい。」

背の高い子がミーメの前に進み出て言いました。

「えへへ。じゃ、問題です。上はごろごろ、下はころころ、最後はさらさら、ここど～こだ？」

「場所なのね？」

「うん。」

ごろごろといえはふつう雷ですが、ころころというのが違っていそうです。あとは岩。それから考えると、ころころが石だとして、さらさらが砂……。何だかこの路線が正しそうです。

するとこの問題は。「上が岩、下が石、最後が砂になる場所」ということになります。そこはどこなのでしょう？上と下、天と地、風上と風下、川の上流と下流……そうです。この問題は……

「わかった、川よ。川の上流と下流では岩、石、砂って、石の大きさが違うものね。」

「あたり～！すごいな、お姉ちゃん。僕なんか三日もかかったのに。」

「あ。やっぱりそれでよかったのね。この村へ来て出される問題って、みんな難しくて。今日何問やったかしら？もう疲れちゃった。あはは。」

「今夜はここでゆっくりして行ってね。」奥さんが言いました。

翌朝、朝食が済むと、ジオルマーニさんが工場に連れていってくれました。大きな機械の横に、緑色の葉が山のように積まれています。

「あの綿菓子はこの葉っぱが原料なんですか？」
「コマロッカというんだ。このあたりにはたくさんある。」

大きな機械では、そのコマロッカの葉を、まず水に溶かし、それを薄くのぼして焼いて、お煎餅のようにします。すると、そのお煎餅が大きく膨れて綿菓子状になるのです。

「さあ、次はカップンさんのところだよ。あ、そうそう忘れてた。これがうちの鍵。」

ジョルマーニさんはそう言って、星形の板を渡してくれました。

(なんだか、きちんと順番が決まっているみたい。)
ミーメは、そのとき何となくそう思いました。

□ (5) 3本の塔

カップンさんの家を訪ねていくと、すぐそばに大きな3本の塔が立っているのが見えました。

「やあ、いらっしやい。」シャム猫のカップンさんが出迎えてくれました。アイシャドーのような黒い斑点のついた目がきらきら光っています。「それではさっそく問題です。毎日かわりばんこに走る2つの大きな玉。でもたまに重なる、これ何だ？」

「毎日2つの玉……といえば、太陽と月ですか？」
「正解です。よくできましたね。」カップンさんはごろごろと喉を鳴らしました。

ミーメはその前の晩ジョルマーニ家のベッドの中で考えました。この村の人たちはなぜこれほどまでに「なぞなぞ」にこだわるのだろうか？
「なぞなぞ」が好きだから？たしかに最初に出会ったロツテお婆さんはそう言っていたけれど、なんだかそれ以上の意味がありそうな気がする。

始めから終わりまで「なぞなぞ」の順序が決まっているらしいこと、それにその答が「水」「光」「川」……みんな自然界にある、形のない、捉えどころのないものという意味では共通したものであるらしいことに彼女は気付いたので。今、カップンさんが出してくれた問題もやはり自然界にあって、決して手には触れられないものなのでした。

「さて次は……と言いたいところですが、私の希望としては、ここを
ぜひ見て行って欲しいのですよね。」

「は？」

「この塔をご覧ください。」

カッペンさんは、そばの大きな塔を指さしました。

「この塔は……俗に言う『ハノイの塔』なのです。一方の柱から反対側
の柱にこれら13個の輪を移し換える、真ん中の柱は作業用です。た
だし、輪の順序は上と下を変えてはいけません。そしてそれができた
ときこの世が終わる……。」

「聞いたことがあります。でも、これはたしか数学的に解決されている
んでしたね。」

「そうです。輪を動かすのが1秒に1回なのか、1分に1回なのか、1
年に1回なのかによってかかる時間が違ってきて、結局この世の終わ
りがいつなのかはまだわかりませんが、一般的な数学問題として
のこの塔の問題は、興味がつきることがありません。だから私はこの
塔のそばに家を建てたのです。」

「え、この塔、カッペンさんがお作りになったんじゃないんですか？」

「この塔のほうに先があったんです。なぜだか。」

□ (7) 小学校

カッペンさんの家を出たミーメは、小学校に向かいました。

これで鍵は4つ。鍵探しもこの次で最後になるはずです。

小学校では、広場で数人の子どもたちがかけっこをしたり、跳び箱を
とんだりして遊んでいました。あのジョルマー二さんの子どもたちの
姿も見えました。

「やあ、いらっしやい。」

校門を入るとすぐ誰かが声をかけてくれました。

「こんにちは。あなたは？」

「校長のペナンです。お待ちしていましたよ。」

その校長先生は、なんだか前にも一度見たようなうす茶色のくま……
そう、ちょうどおもちゃ売場のぬいぐるみのようなんだわ、とミーメ
は思いました。

「さてと、じゃあ問題いくよ。……みんなその中にいる、でも、
普段はそれは違うものにしか見えない。これなんだ？」

「普段は違うものにしか見えない？うーん，難しいですねえ。」

「じゃ，ヒント。この村のことなんですよ。」

「えっ？！えーと……」

ミーメは駐在さんに見せてもらった地図を一生懸命思い出していました。この村にあるものといえば，湖，川，村人の家，木，花畑，そして村全体をすっぽり覆うような森……残ったものといえば，森しかないのです。でも，当たらなくてもともとです。

「よくわかりませんが，森ですか？」

「うん。そうです。森が正解です。何故かといえば，森はよそから見るから森なのであって，この村の中からはただ木が生えているとしか見えませんよね。森とは，いわば集合体を指す言葉，概念なんです。」

なるほど，とミーメは思いました。

「さて，これが鍵です。」

ペナンさんの大きな手から小さな楕円形の鍵が彼女に渡されました。

「これを持ってね，村の南に行きなさい。そこに大きな鏡とテーブルがある『あずまや』のような所があるから，そのテーブルに鍵を置きなさい。それから先は私にはわからないんだが，たぶんこの村からどこか他の場所に行くはずだ。」

「ありがとうございます。南ですね。」

「うん。では達者でなあ。」

「さようなら。」

たしか駐在所で見せてもらった地図では，小学校から南には大きな木が3本立っていたはずだわ……彼女はそう思って木が3本立っている方向へ歩いていきました。3本の木が生えてるところを通り過ぎてしばらく行くと，見覚えのある家の前まできました。この村で最初に会ったロツテお婆さんの家のように。そういえば，お婆さんは「なにかあったらまたおいで」と言ってくれていたっけ……。

「ごめんください。」

「はいよ。今あけるから。よいしょっと。……ああ，あんた。鍵は集めたかい？」

「ええ。おかげさまで5つ揃いました。これから出口に行きます。」

「そうかそうか。それはよかったねえ。」

「あの，お婆さま。」

「ん？」

「おばさまは昨日たしか『なぞなぞは、この村の人の道楽だから』とおっしゃいましたけど、私なんだかそれだけじゃないような気がしてしょうがないんです。本当に道楽なんですか？」

「ふふふ。そうだよねえ。全部つながりがあるとしか思えない答ばかりだもんねえ。そりゃ楽しみ、道楽も確かにあるんだが、実はね……みんなが旅人に出すなぞなぞは、すべてがその家に代々伝わっているものばかりなのさ。いつもはもっと普通の問題を出して喜んでいるんだが、旅人が来たときにしか出せない問題というものがあるんだ。」

「へえ。でも、なぜそんなふうになったんですか？」

「うん。この世界の偉大なる支配者、マカテクス大王という方がお決めになったんだそうな、」

「マカテクス大王……。」

「わしもお会いしたことはないが、この世界で一番偉い方なんだそう。……ああ、こんなことまで話していると、日が暮れてしまう。さあ、行った行った。」

「どうもありがとう。じゃあ、さよなら。」

さらに南に行くと、校長先生の言ったとおり、大きな鏡のかかった『あずまや』がありました。

第7章 鏡の向こう側

あずまやの中の壁は青い色に塗られていました。その中に大きな丸い鏡がかかっています。部屋の中央には丸いテーブルがあって、正方形の板が載っていました。

「これね……。じゃ、ここにおいてっと……。」

ミーメはテーブルの上の板に集めてきた鍵をひとつずつ置いていきました。最後のひとつを置いたときです。

ドドーン！

鏡から雷のような光の束が落ちてきて、5つの鍵を飲み込み、明るく輝かせたかと思うと、鍵が空中を円を描くようにして鏡の中に吸い込まれていってしまいました。ミーメが驚いて見ていると、鏡の中に黒い影が現れて、太い声で言いました。

「私を呼びだしたのは君か？何の用だ？」

「私、ここから出て、もとの自分の世界に戻りたいんです。村の人に

きいたら、こうすれば出られるって。でも、あなたは？」

「そうか。ではまた挑戦できるというわけだな。」

「えっ？」

「まあそのことはあとで話そう。では今君がいる世界とは違う世界に連れて行ってあげよう。ただし、すぐじ君のもといた世界に連れていくというわけにはいかないのだ。ちと頼みたいことがあるのでね。ではまずこちらにおいで。」

目の前がぱっと明るくなったかと思うと、ミーメの体は、突然鏡に吸い寄せられ、まるで水の中に飛び込むかのように鏡の表面を通り抜けました。

「あっ！」

水面のような鏡の向こう側は少しのあいだ黒い空間になり、そこを抜けると、白い光が射し込むもう一枚の鏡が見え、彼女はまたその中に引き込まれていきました。

鏡の中には、たいそう立派な宮殿の広間になっていました。あわてて立ち上がると、目の前に玉座があり、そこに龍の顔をした、王様らしい人が座っていました。

「気がついたかな。私がマカテクス大王だ。」

「あ、あなたが。初めてお目にかかります。ミーメといいます。」

「おい、こちらに椅子と飲み物を。」

王様は遠くに向かって言いました。

「はっ」

後ろのほうから声が聞こえて、鹿の顔をした従者が椅子を持ってきてくれました。羊顔のメイドも来て、茶色い飲み物をついでくれました。紅茶に似た、なかなかおいしい飲み物でした。

「さて……。」ミーメが飲み終わるのを待って王様が言いました。

「君にここに来てもらったのは、むろんあそこからつながる道がここにしか通じていないせいもあるんだが、ちと頼みたい事があってね……。」

王様は立ち上がって後ろの壁に書かれている地図に近づきました。それはあの駐在さんの所の地図の何倍もあって、森だけではなく、海や山や谷や鉄道の路線などが書かれている、たいそう立派な世界地図でした。でも、それを見るかぎりでは、ミーメがいた世界と比べるととても小さな世界のようにでした。

「この世界は、今は他の世界の人々からは『獣人界』と呼ばれている。

まあ、見ての通りだが。だがもともとは皆別の姿をしていたはずなのだ。昔描かれたこの世界の住人の絵を見ると、みな君のような姿をしているんだよ。」

「では何故そうなったのか、王様にもおわかりにならないのですか？」

「うん、問題はそこなんだ。実はわれわれにはここ15年以前の記憶がないのだ。気が付いたときにはもうこの姿をしていた。名前や職業は昔からそうだったかのように振る舞ってはいるが果たしてその通りだったのかどうかさえわからない。とりあえず住民たちには、なぞなぞの問題という形で、自分たちの生活に必要なものを常に思い出させるようにしておいたのだが。」

やっぱり、あのなぞなぞの答は意図的に作られたものだったようです。あの5つの答は、この世界をもとの姿に戻そうとする王様の努力だったのですね。でも、自分たちが本来どのような姿をしていたのかわからないなんてつらいだろうな…とミーメは思いました。

「だが…それでもひとつだけわかっていることがある。」

王様はミーメの目を見つめながら言いました。

「この宮殿を出たところに、大きな洞窟がある。そこには何でも願い事を叶えてくれる剣があると聞く。その剣に『この世界をもとの姿に』と願えばいいんだが、この世界の住人ではそれができない。」

「とおっしゃいますと？」

「洞窟の入り口には見えない壁のようなものがあって、何故かこの世界の住人はそこに入ることすらできないのだ。君の前にも何人か他の世界からきた人たちがいて、その人たちは入ることができたというのに、だ。だが彼らは入ったきり出てこない。だから洞窟内部がどうなっているのかという話を聞けない。そんなところへ、女性の君を行かせるのは私としてもまことに心苦しいのだが、この世界を救うためだと思って、剣の所まで行ってはくれまいか。」

「そうしたら、もとの世界に帰していただけるんでしょうか？」

「うん。そうするつもりだ。私の所にある『時空の鍵』を使えば、どこへでも行ける。」

「わかりました。そういうことなら、行ってみます。」

「頼む。」

第8章 金色の剣

ミーメは洞窟の前に立ちました。

(これからまた未知の世界に踏み込んでいかなければならないのね。)
洞窟の入り口を通るとき、体の中を風が吹き抜けていくような感触がありました。おそらくこれが王様が言っていた「見えない壁」なのでしょう。

洞窟の中は、水晶の輝きでまばゆいばかりでした。でも、どこも同じような水晶の柱で、すぐ道に迷いそうです。

(どうしたらいいのだろう?) 入り口に立ったまま、彼女は考え込んでしまいました。(そうだわ、ノア博士がくれたあれが役に立たないかしら?) ミーメはリュックからノア博士がくれた巻物のようなものを取り出しました。貰ったときは、とても軽くて円筒状なので巻物のように感じたのですが、改めてよく見てみると、それは全体が何かの金属でできていて、巻物のように開くところはどこにもないのでした。何かボタンのようなものがついています。とりあえず押ししてみましたが、なにも起こりません。

「どうやって使うのかしら、これ。」彼女がそういったときです。

「やあ、ミーメ。元気かね。」突然、声が聞こえました。

「えっ、えっ、あ、もしかして博士?」

「そうじゃよ。ははは。また驚かせてしまったかな。おまえさんにあげたそれは通信機なんじゃ。」

「あ、なあんだ。そうだったんですか。」

「で、何かあったのかね?」

「私、何故か違う世界にきてしまって、獣人界っていうんだそうですけど。そこの水晶の洞窟にいるんですが、なんだか迷いそうなんです。」

「ああ、よし。じゃ、待ってなさい。おまえさんが今いるところを確認してあげるから。」

しばらくして、博士が言いました。

「ああ、なるほど……。おまえさんが今いるのは『法極』じゃな。大きなエネルギーのもとがすぐ近くにある。そのエネルギーがその世界を大きく包み込んで影響を及ぼしているんじゃ。」

「法極ですって? 聞いたことないんですけど、磁極みたいなもの?」

「この星の特殊エネルギーを支えている点のことじゃよ。もっともこのことを知っているのは限られたわずかな数の人間だけじゃがね。いってみるかね?」

「はい。そのように頼まれていますので。」

「じゃあ、向かって右の方へ30度……。そうそう……。あ、ちよいとずれた。もう少し、わずかに左に……。うん。」

そこには、正方形の台があり、中央に金色の剣が刺さっていました。

「これだわ。本当にあったんだ。」

「何の用だ。」

剣の中から人影が現れました。この人も王様のような服装をしていますが、さっきのマカテクス大王と違って、ミーメと同じ「人間」の顔でした。でも背の高さがミーメの半分ほどしかありません。

「私，ミーメと言います。この世界を元の世界に戻してほしいんです。」

「うん。同じようなのが何人かきたっけな。だがそれは私の力だけではできないのだ。もう一人の『銀珠王』の力がなければな。」

「その方は今どこに？」

「反対の法極にいるはずだが，何故かそちらのエネルギーが衰えている。もうかれこれ15年ほど前のことだ。われわれは2人で1人。一方が衰えればもう片方も衰える。私ももう，周りにバリアを維持するだけで精一杯になってしまった。」

「じゃあ。お2人のバランスが崩れたから，この世界が変わってしまったんですか？」

「残念ながらそういうことだ。お前がここに来てしまったのも，おそらくそれが原因でときどき出現するようになった『空間の穴』のせいだろう。」

「じゃ，もしこれから反対の法極というところに行って，そのエネルギーを何とかできれば……。」

「たぶんこの世界も元に戻せるし，空間に穴があくこともなくなるだろう。だがあくまでも，なんとかできれば，の話だ。それにここから反対の法極までは遠いぞ。」

そのとき，通信機を通して博士が言いました。

「あ。いや。それはわしがなんとかしましょう。」

「その声は……ドクター・ノアだな。久しいな。」

「お久しぶりです，『金龍王』様。」

「あら。博士。ご存じだったんですか？」ミーメは驚いて言いました。

まさかこの人が博士の知り合いだったなんて。

「この星の時空を自由に旅するためには，技術的なことのほかに，お2人の許可をいただかないといけないんじゃないよ。」

「へえ。」

「お前がいてくれれば話が早いな。では頼むとしよう。」

「では，ミーメ。目をつぶって。」

「じゃあ，『金龍王』様，さようなら。」

「うむ。では頼んだぞ。」

ミーメは目をつぶりました。「……さあついた。」いつかと同じように博士の声が聞こえて目を開けると，そこにはまた別の世界がひろがって

います。

「そこが反対の法極じゃよ。」

「ああっ！ここは！」

ミーメは驚きました。そこは、いつか通った城塞都市カブーだったのです。

第9章 銀殊王

(城塞都市カブー……住民がいなくなった街……。)

そこは何ヶ月か前に彼女が訪れたときと全く変わっていませんでした。大きな沈黙の中で、人っこひとりいない道と、巨大な石造りの建物だけが静かに眠っているばかりです。

「来たことがあるのかね？」すぐそばで声がしました。横にドクター・ノアが立っていました。

「あら博士。来て下さったんですか？」

「うん。遠くで話しているばかりでも何なのでな。」

「でも、ここの人たちはみんなどこかに行ってしまったんですよ。」

「そうらしいの。じゃが、まさか『銀殊王』様まで移動してしまったということはないじゃろ。」

「どういう方なんですか？」

「さっきの『金龍王』様を想像していると、また驚くかもしれんから、前もって話しておこうかの。こちらの『銀殊王』様のほうは、犬のような姿をした方なんじゃよ。」

「へえ。でも、私もう『獣人界』で慣れちゃいました。」

「ははは。そうか。あそこはそういうところじゃったのお。じゃ、行こうか。」

博士はミーメを連れて街の中心にある大きな建物の中に入っていました。階段をどんどん下に向かって降り、高さが3メートルはあろうかという大きな扉の前まできました。博士が「大いなる光あれ」と扉に向かって呼びかけると、扉は静かに開いて、もうひとつ小さな扉があらわれました。

「『銀殊王』様、いらっしゃいますかの？ドクター・ノアですじゃ。」

博士が少し大きめの声で言うと、中から女の子の可愛らしいの声が聞こえました。

「おはいりなさい。」

扉がかちゃりという音を立てて開き、二人は中に入っていました。そこには大きな広間があって、中央に銀色の剣が正方形の台に刺さっていて、そばに金龍王と同じような服装をした一匹の子犬が座っていました。（きつとこの人が銀殊王様なんだわ。でもどこから見てもぬいぐるみね。）ミーメがそう思っていると、その『銀殊王』様が語りかけました。

「ドクター、旅はどう？楽しい？」

「はい。お陰様で。しかしながら、銀殊王様には、何かご不都合なことがおありとか。」

「ええ。実はそうなの。……そちら、お知り合い？」

「ミーメといいます。」

「彼女は。植物を操れますのじゃ。」博士がいい添えてくれました。

「そう……。でも、これはちょっとねえ。」

「どうなさったんですかな？」

「実はねえ……。私。金剛杖を無くしてしまって。あれがないと、エネルギーの調節がうまくいかないので、エネルギーの放出を止めてあるの。本当はしてはいけないことなんだけど、暴走するよりはマシなものね。でもなぜか最近は私自身の力が弱まってきたように感じるのよねえ……。金剛杖は、他の世界に出てる時はたぶんこんなナイフの形をしてると思うんだけど。」

銀殊王が差し出した両手の中にぼうっと1本のナイフが浮かんできました。赤い宝石がはめ込まれています。

「あっ！」

「どうしたね？」博士が尋ねました。

ミーメは以前それと全く同じ形のナイフを見たことがあったのです。カブーで出会った、あのティリカの持っていたナイフ……。

「カブーのティリカっていう女の子が持っていたのがそっくりなんです。」

「で、その子はどこに？」銀殊王が尋ねました。

「それが……この街の人たちと一緒にどこかに引っ越したそうなんです。」

「ははあ、それでわかった。その金剛杖というものが、今度はその子ごと銀殊王様から遠く離れてしまったから、エネルギーの減少が一層激しくなったんじゃ。」

「でも、街の人たちがどこに行ったかは知らないんです。」

「それならすぐわかるわ。あの暦は。と……。」

銀殊王がまた両手を広げて差し出しました。どうやら、この人には、こう

すると、ものを自由に映し出す力があるみたいですね。3人の前に、時計の文字盤のような、丸い暦が出てきました。びっしりと目盛りがついています。銀殊王がそれを見ながら言いました。

「ああ、なるほど……。ここから東北東に45度。距離にして30ギランね。それにしても。あの人たちがあんなにこの暦に熱中してしまうなんてねえ。こんなことになるのなら、この暦、あげなければよかった。」

「えっ？じゃあ、この暦はもともと銀殊王様が？」

「うん。いつかひどい日照りが続いたことがあってね。そのときあらかじめ災害に備えておけるように、この『天空の暦』をあげたんだけど、いつのまにかそれに余分なものがいろいろついたらしいの。」

「そういえば、ティリカもその暦がもともと男の子みたいな格好をすることになったって言ってました。」

「古いものを大切にするのはいいことなんだけどねえ……。」

銀殊王はちょっと首を傾げながら言いました。

「でも、銀殊王様は、何故金剛杖を無くされたんですかな？」

博士が尋ねました。

「うーん。それがねえ、あるとき、お風呂に入ってたから、どこからか黒い影があらわれて、置いといた杖をさらっていったのよ。でもそのときって、お風呂だったから、裸でしょ。外まで追いかけていけなくて。」

「黒い影ですと？」

「待って。私のフルートと同じような状況ねえ。」ミーメが言いました。

「あの博士のところのウサギちゃん、なんだかわからないくらい、すばやかかったもの。」

「そういえば……ちらっとだったけど飛び跳ねるような動き方がウサギぽかったような気がしなくもないわねえ。」

「す、すると、ひょっとしてまたわしのせいかも。」

博士も思い当たったようです。

「きっとそうにちがいない。あれには時間移動機能を付けてあったんじゃない。」

「あらあ。ドクターの発明品だったのぉ？」

「い、いやあ、もしそうだとしたら、本当に申し訳ありません。わしが責任もって探してきます。」

「そりゃ、ドクターには、この建物とか、いろいろこしらえてもらったことだし、杖さえ返してもらえればそれでいいんだけど……ね。」

「申し訳ありませんっ。」

博士はもう汗びっしょりになって、頭を深々と下げています。

第10章 ネオ・カブー

博士の発明品のひとつで、画面上の地図の一点を指定するとその場所にワープできるという『地図，わっ』で、あっという間に銀珠王が教えてくれた場所に着いた二人は、煉瓦づくりの門と城壁で囲まれた大きな街を目にしていました。

門をくぐったところで、ミーメがくすつと笑いました。

「ん？どうかしたかね？」

「博士って、ワープがお好きなんですか？なんだか私，そういうものばかり見ているような気がするんですけど。」

「まあ，そういえばそうかもしれんね。旅行は好きじゃったね，昔から。……じゃ，いこうか。」

博士は顎鬚をなでながら，にこつと笑いました。

二人は，銀珠王から教えられた族長の家を目指していました。そこで，ティリカの家のことを訊くためです。族長の家は中央の広場のすぐ脇にあって，それは一つの大きなテント張りの家でした。隣にも，そしてそのまた隣にも同じようなテントが並び，様々な服装をした人々が忙しく行き交っています。ティリカと同じように，男性のなりをした女の人もけっこう多いようでした。

「ごめんください。」

「はい，どなたじゃな。」中から白い髭のおじいさんが出てきました。

「ノアと言いますじゃ。ティリカという女の子の家を訪ねたいんじゃが，どこにあるか教えてくれませんか。」博士が言いました。

「ティリカはわしの孫ですが。」

「おお，族長さんのお孫さんじゃったのか。」

「おーい，ティリカ，お客さんじゃぞ！」

「はーいっ！」中から声がしてティリカが出てきました。

「お久しぶり。」

ミーメが声をかけると，ティリカは最初すぐには思い出せないようでしたが，やがて人なつっこい笑みを浮かべました。

「やあ。君だったの。誰かと思っちゃった。ま，あがってくれよ。」

2人はテントの奥に通されました。絨毯の上でお茶を飲みながら話が進みます。博士がこれまでのいきさつ……金龍王と銀珠王の力のバランスが崩れて一つの世界が変わってしまったこと……をかいつまんで説明しました。ただ銀珠王がこの街の人々の暦の使い方について少し困惑していたらしいことを除いて。

「というわけで，あなたがもってるナイフを銀珠王様に返してあげて

ほしいのよ。」

「へえ、これがねえ。」ティリカは腰に差していたナイフを取り出して、しげしげと眺めています。

「そういうことなら、しかたないじゃろう。ティリカ、返しておあげ。

フムの形見なら、まだいくつが残っていたらう。」

族長が言いました。

「そうだね。じゃ。」

ティリカはナイフをミーメに渡しました。

「ありがとうございます。銀珠王様、元に戻るといいけど。」

「戻るとも。このナイフには、こうして族長さんや、ティリカちゃんや、おまえさんの心がこもっているんじゃないからな。」

「それにしても、あの場所にそんな偉い方がいらしたとは知らなかったのう。あの街に関することで、族長のわしでも知らぬことがあったとは……。」族長が言いました。

「ではご存じなかったんですか？」

ミーメは不思議に思いました。街の族長というような立場の人が、自分の街の中央にある建物の内部に入ったことがないのでしょ

うか。「うん。あそこは古来例外なく立入禁止ということになっていたんでな。じゃが、そういうことになると、あの街に戻らねばなるまいて。……どうやら、わしらは大切なことを忘れていたようじゃな。」

第11章 大いなる光

カブーの族長ソナはさっそく街じゅうの人々を呼び集めました。

「そういうわけで、みんなの意見を聞きたい。このままここに居続けるか、もとの場所に帰って、銀珠王様をお守りしてともに暮らすか、どちらを選んだらよいか。」

「族長はどうお考えなのですか？」男の人がひとり進み出て言いました。

「その方が、我々がいま生活の糧としているオシンコシン暦を下さった方だということは、すなわち我が民族の主長も同然ではないかと思う。その方の世話をせずして、どうして我々に繁栄などあり得よう。」

「では、反対する理由がないではありませんか。」

「そうだ。帰ろう。一度移動して危機は去ったはず。」

「元の場所へ。族長、帰りましょう。」

町の人が結論を出していたそのころ、ミーメとノア博士は、ティリカを連れて一足先にもとのカブーの。銀珠王の部屋に着いていました。

「これがそうですか？」ミーメがナイフを差し出しました。
「そうそう、これなのよ。ありがとう。取り戻してくれて。」

銀珠王がナイフを手にとると、それは見る見る形を変えて、金色の長い杖になりました。

「やっぱりそれだったんだ。」

ティリカが残念そうに言いました。

「あなたには悪いんだけどね。そうなのよ。」銀珠王が言いました。

「でもそのかわり、とってはなんだけど……ここに来たいなと思ったら、いつでも来ていいわよ。あなただけ。」

「えっ、ほんと？」

「もとはといえば、全面立入禁止にしてたから、忘れられちゃったみたいだしね。」銀珠王はウインクをして見せました。

銀珠王は、杖を手にするると、呪文のようなものを唱え始めました。

「大いなる光、これに来たれり。我が手に来てまた散るべし……。」

銀珠王の姿が目もくらむばかりの大きな光の束に包み込まれたかと思うと、あの水晶の洞窟の入り口で感じたような、まるで体の中を壁がすり抜けていくような感触があり、静かな鳴動がしばらく聞こえました。

「これですべてもとに戻ったはずよ。」

目を開けると、いままでふつうの明るさだった部屋の内部が赤みがかった金色に変わっていて、どこか荘厳ささえ感じるようになっていました。

「でも、これでめでたし、めでたしですね。」ミーメがそう言うと、博士が言いました。

「いや、あと一つ残っているよ。あのいたずら坊主を捕まえて、改良してやらなくてはならん。もっとおとなしくするようにね。」

「あのうさぎちゃんね。」

ミーメは博士の黒いうさぎのことを思い出しました。

「じゃ、ここに呼びましょうか。服を着た黒いうさぎでよかったわね。」

銀珠王はそう言って、杖を振りました。するとどうでしょう、次の瞬間には黒いうさぎがちょこんとそこに載っているではありませんか。

「おお、これです。ありがとうございます。銀珠王様。このいたずら坊主が！」

博士は早速ウサギに近寄って行って、自分の子供のように頬ずりして、それからあれこれ調べ始めました。

「あ、いいなあ。僕もほしいや。」ティリカが言いました。

銀珠王のところで3人はコーヒーをごちそうになりました。ミーメは自分の街を思い出していました。まさかこの街のように、忽然と消えているようなことはないにしても、彼女が旅立ってからかれこれ半年は過ぎているはずでした。

「さて……と。じゃあ、私帰らなきゃ。」

「そうじゃったね。今度のことで君にえらく迷惑をかけてしもた。すまなかった。」博士が言いました。

「いいえ、楽しかったです。いろいろな人と話して、いろいろなところに行って。」

「あなたも、よかったらまた来てね。待ってるから。」銀珠王が言いました。

「僕も。」ティリカも言いました。「会うのは今度でまだ2回目だけど、なんだか君とはいい友達になれるような気がするんだ。」

「うん。そうだといいね。」

博士が例の「地図、わっ！」で音楽町の入り口まで送ってくれました。

「じゃ。達者でな。できればこれからもときどきあの空中都市にも来てくれると嬉しいが。」

「ええ、ぜひ行かせていただきます。」

これでいいんだわ……懐かしい我が家の居間で、コーヒーを飲みながら、ミーメはほっと一息つきました。

フルーツがなくなったときはびっくりしたけど、そのおかげで、ノア博士、銀珠王様、ティリカ、金龍王様。獣人界の王様、ジッテン村の人たち……いろいろな人に会えたんだわ。そうだ、獣人界の人たちはどうなったんだろう？ちゃんともとに戻れたのだろうか？ああ、博士にちゃんと訊いておくんだった……。ま、いいか。また遊びに行けばいいんだから。

(完)

あとがき

この「不思議の森のフルーツ」は、1995年の冬から1997年の8月まで、1年と半年ほどをかけて、NIFTY-SERVEのフォーラム・FGALRAY 7番・文芸会議室で連載させていただいた作品です。

この連載のあいだじゅう、実はネタを探すのにけっこう手間取りました。教訓としては「やっぱり日頃から読書！」でしたね。(^^)

当初の予想としては、もっと恋愛とか、からくりもどきみたいなことを書く予定で、ミーメが住む世界を「不思議の森」にして、フルートが見つかるまでの道中をもっと長くするつもりだったのですが、結局特別な能力を見せてくれたのは、主人公のミーメとトランスポートーション(?)の名手・銀珠王、ずば抜けた科学力を誇るドクター・ノアだけで終わってしまったような気がします。実際、いくつかのアイデアも思いついたまんま、登場していませんので、今後は短編にでも使っているかと思っています。

私自身、フルートは……吹けません。(^^; あこがれはあるんですよ。フルートってよく髪の高い綺麗な女の人が吹いてるじゃないですか。ああいう雰囲気いいなあと。(そんな動機か>私^^;)

この物語に出てくる、カブーという街のモデルは、南アメリカの古代遺跡です。またほぼ同地域にある「空中都市」という街の名前も、設定に一役かっています。あの辺は本当に神秘のベールに包まれているという感じがしますね。

数学における代表的な課題の一つである「ハノイの塔」も古くからあるものです。子供の頃、「おもしろい数学」みたいな本が好きで、よく読んでいました。あの頃もし「おもしろい理科」や「よくわかる音楽」なんて本に出会っていたら、また人生が変わっていたかもしれません。(^^;

作品の著作権について：

本作品は、津田理恵子（ハンドルネーム：三毛猫モカ）が「まるまど文学館」サイトにおいて発表したものです。転載・紹介等につきましては、事前に作者当人宛てにメールをいただきたく、何卒よろしくお願い致します。

連絡先： cosmos_biwa@yahoo.co.jp